

E-49 近代家政経営のための家計簿研究 その2 家計簿による生活診断への

アプロ-ク 2) 家計診断簿の活用による生活診断の可能性
金城学院大 家政 今井光暎 岐阜大 教養 堀田剛吉 静岡大 教養 村尾勇之
揚山学院大 家政 山口久子 金城学院大 輝大 住川浩子 常知淑徳大
谷田沢興子 市川学園大 経済 木金徹 名古屋 自由学院大 〇田中直紀

目的 前掲りの方法で作成した家計診断簿の記帳を主婦に依頼し、得た結果を用いて具
体的な検討を行なう。この研究の目的は次のように整理される。

- ① 記帳結果の数量化方法の検討。
- ② 診断に用いる指標の明確化。
- ③ 記入された値、目標水準等の意識面と金額、物財・サービス等の実態面を、費目ご
とに、家政の経営条件別にグルーピングし、特徴を把握する。
- ④ グルーピングしたものの結果を診断指標にもとづいて検討し、生活診断を行なう。
- ⑤ この家計診断簿および診断方法の有効性、限界、問題点を明らかにする。

なお今回は研究段階の順序により、①～③に焦点をおき、その結果を報告する。

方法および結果 調査の方法は、名古屋市内の主婦50人を対象とし、昭和54年7月1日
から31日までの1ヶ月間、家計費及び価値、目標水準の記帳を依頼。診断方法は、家政経
営を診断指標で示すような“安定”、“発展”、“能率”、“満足”の方向へもつていく
ことが生活改善であるとの基本認識のもとに、記帳された結果を集計分析した。それによ
って記帳者の意識と実態間のギャップをとらえ、実態が意識に近づくように生活改善の方
向を明確化する。すなわち意識のうえでは“満足”の度合いは高いが、診断指標にもとづ
いた満足度は低いと評価されるば、そこに生活改善の方向が自ずと示唆される。以上のこ
とから判断して、この記帳を通じての診断の可能性は見出された。